二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

DRAGOON PRINCESS "THIANA"

竜姫士ティアナ

魔贄に捧げられし姫君

小説 高岡智空
挿絵 あめいすめる

序　章　マディリスの竜姫士　006
第一章　妖魔の言霊　023
第二章　王家の光　068
第三章　恥辱の触手姦　123
第四章　魔人の淫贄　184

登場人物紹介

Characters

ティアナ・マグダリアス

マディリス王国の姫。素直に本音を言えない性格だが、誰よりも国のことを愛していて、ミアキスとともにゲートリッチと戦う。

ミアキス・アーレンフェイト

竜に変身できる飛竜人の少女。ティアナとは幼馴染で、彼女のことを大切に思っている。

リセリア・マグダリアス

マディリス王国を統べる女王。ティアナの母親でもあり、竜騎士として戦う愛娘を心配している。

ゲートリッチ

マディリス王国に宣戦布告してきた魔人。妖魔を操り、ティアナのことを「餌」とつけ狙う。

『第二章　王家の光』より

なぞられたショーツはまるで刃物に裂かれたように切れほどけ、ティアナの秘部が剥きだしになる。グチュグチュと淫液を絡めながら蠢く媚肉に空気が触れ、ゾクゾクと背中が震えた。けれどそれと同時に、隠されていたはずの陰唇をイドの視線に晒されているということに気づかされ、ティアナの頬が羞恥で燃えるように熱くなり、真っ赤に染まる。

「やっ……なっ、なに、するのっ……ひぃんっ！　見ちゃっ、やっ……くぅんっ、はぁ……さ、触ら、ないでっ……言ってる、でしょ！」

脚をバタつかせて太ももを閉じようとするが、イドが太ももをねちっこく撫で回しながら力を込めると、抵抗も虚しく両脚がさらに大きく割り開かれる。それに引っ張られるように、口を閉ざしていた淫花もネットリと淫液の糸を垂らしながら、その桃色の唇を広げてしまう。髪と同じような金色の陰毛で僅かに覆われた陰唇の奥は、透明の蜜をたっぷりと絡めて卑猥にぬめり光り、淫靡な朱色で満たされている。

「やめろっ、閉じ……閉じなさいよっ、いますぐにぃっ……くひっ、ふぁあっっ！」

まるでティアナがそう叫ぶのを待っていたかのようなタイミングで、イドは落ちたショーツのなれの果てを拾い、小さく畳んで淫裂に宛てがってそのまま擦り上げた。小悪魔の唾液や少女の牝蜜と汗……淫らな臭気を放つそれらを潤滑油に、布切れはグチュグチュと卑猥な水音を響かせて、涎を吐きこぼす陰唇を磨こうとする。けれどそれは拭っているというよりは、淫らな証を擦り込んでいるようなものだった。

「ひゃっ、やめっ、てぇぇっ……んぅっ、ひっ、くひぃぃんっ！」

陰唇をなぞるように、布を絡めた指先が溢れる淫蜜を掻きだして、痺れるような快感を送り込んでくる。ビクビクと跳ね上がった腰は、股間を布切れに押し込んでさらなる甘美な感触を味わわされてしまった。悲鳴をもらして制止を求めるがイドの指はまったく止まらずに、ただひたすら陰唇を掻き回して、溢れる蜜液を掻きだしてゆく。幼女の粗相の後始末をするような妖魔の行為、年頃になっているのにそんなことをされる羞恥は、ティアナの誇り高い心をズタズタにしようと苛んでくる。

（い、いやぁぁ……なのにっ、また、出てるぅぅ……んくっ、くふぅぅっ）

すでに最初に溜まっていた淫蜜と唾液の混合液はショーツに吸われ、さらには流し落とされて、床にはしたない染みとなって広がっている。それにも拘らず、ティアナの淫らな穴は奥から湧水のように、牝蜜をコプッ……ゴポッと噴きこぼし、新鮮な淫水を湛えている。それをニヤニヤと眺めながら、イドは真っ赤になって背けられたティアナの顔を見つめて揶揄するような言葉を吐く。

「これはどうしたことですか、姫君……確認しようといくら拭って差し上げても、あとからあとから濡れてくるではないですか……ふふふ」

「いひゅっ、ち、違うっ……あたし、知ら、ないぃ……」

ブンブンと顔を振りながら、否定の言葉を呟く唇が羞恥に震える。その恥ずかしさに触発されたように、またもゴポリとくぐもった水音が響き、淫蜜が噴き溢れてイドの指先に滴らされた。呆れたようなイドのため息が耳に届き、ティアナは耳まで真っ赤になる。

「これではキリがありませんねぇ、すべて吸いだすことにいたしましょうか」
「なっ、なにをっ……ひゃぐぅぅっっ⁉　んひっ、ひぃぃっ、それっ、やぁぁっ！」
ピチャリ……音を立てながら、ティアナは秘部に触れる生温かいぬめりを感じた。イドの唇が触れているということは、もはや見なくてもわかる。またも股間の臭いを嗅がれ、しかも恥ずかしい蜜を舐め取られるという羞恥を味わわされ、脳内が沸騰しそうなほどの熱が身体中に広がってゆく。
恥ずかしさのあまりに言葉もだせないティアナ、その股間に顔を埋めたイドは舌先を伸ばし、媚肉にポッカリと開いた淫らな穴に滑り込ませる。太ももを舐められていたのとはまったく違う、直接的な快楽の波が下腹部を突き抜け、ティアナは喘ぎを迸らせた。
「あひぃぃんんっっ！　ひぁっ、やっ、挿れるなぁぁっ、ぬ、抜きなさいぃっ！」
――ジュプルッ、ニュル…ジュプッ、チュル、ジュゥゥ……。
竜姫士の淫らな鳴き声を堪能するかのように、イドは舌先を縦横に躍らせて淫肉の内側を徹底的に嬲り回す。苦味のある甘酸っぱい淫液を吸い上げ、ザラついた媚肉を舌の腹でベロベロとしゃぶり、半分ほど包皮の被った陰核に向けて鼻先を押しつけて擦り上げた。
「ひきっ……んひぃっぃぃっっ！　いぁっ、な、なにっ……あぁぁっっ！」
その瞬間、初めて感じる雷に打たれたような鋭い快感がビリビリと背筋を痺れさせ、弾かれたようにティアナの身体が跳ね上がる。瞳は大きく見開かれ、甲高い悲鳴をもらして開かれた口からは、桃色の舌先が突きだされ、ヒクついていた。覚えのない感覚に弛緩さ

せられた腕は重くて動かず、しかも太ももはイドによって押さえられたまま、そのためにティアナは大股を広げてブリッジするという、とてつもない痴態を晒させられる。それは股間をイドの顔に押しつけ、さらなる奉仕をねだろうとしているような姿だった。

（いやっ、あぁぁっ、こんなっ……こんな恥ずかしいのにっ、なんで感じるのよぉっっ！）

媚肉の中を舌が這い回るたびに、ティアナの全身がビクンビクンと激しく痙攣して快感を訴える。しかもその事実は淫蜜となってイドの口の中へと溢れ、一番知られたくないこの青年妖魔に知らせてしまうのが恥ずかしくてたまらない。時折響くゴク、ゴク……と喉を鳴らす音に、淫蜜が啜られていることを思い知らされ、燃え盛る羞恥に身が捩れる。

「ちゅぶ、じゅるぅ……ふふ、果実のように瑞々しく、芳醇な香りですよ……姫君」

「ひぁっ、あ……やだっ、飲むなっ……離れてっ、離れなさいよ……っ」

自分で腰を押しつけるような格好をしながらそんなことを叫ぶのは、滑稽以外の何物でもなかった。けれどイドはそれを聞き入れたように身体を離し、その粘液で汚れた顔をティアナに近づけて言い聞かせるようにささやく。

「ほら、これが貴女の感じているという証拠ですよ……しっかり味わいなさい」

「なっ、やめっ……んぶっ、んんぅぅぅっ⁉」

なにをされるのかを悟ったティアナは顔を逸らそうとしたが、一足遅かった。たっぷりと蜜液を含んだイドの唇が己の唇に押しつけられ、甘酸っぱい牝の味を喉奥に流し込んでくる。捻じ込まれた舌先に口内を舐め回されて抵抗を奪われると、そのまま舌を漏斗代わ

りに蜜液が注がれ、喉の粘膜をなぞりながらトロリと伝い落ちる。
（う、嘘っ、いやぁぁっ、こんなのっ……）
己のはしたない証拠を舌で味わわされる、これほどの屈辱もないだろう。膣から吐きだされたばかりの淫液は、濃厚な牝臭を立ち昇らせて胃臓や肺を満たしてゆく。自分の身体の隅々までが淫らに染め抜かれるような感覚に、ティアナは最低の苦痛を感じていた。
なんとかして吐きだそうとするのだが、顎を掴まれたままで口づけされては自分から離れることはできず、しかも飲み下すまでは解放するつもりがないというように、嚥下を促すような舌の動きが、敏感な口内粘膜をピチャピチャと舐め回してくる。生温かい粘膜塊が舌に絡みつき、唾液が泡立つほどに激しくもつれあわされる。その感覚にゾクゾクと背中を震えさせ、ティアナは己のもらした牝蜜をすべて飲み下すしかなかった。
「んくっ、んっ……んぅ、ぷはっ、あぁっ……げほっ、げほぉっ！」
数分にも及ぶ口づけから解放され、ティアナは嫌悪から激しく嘔吐き、咳き込む。けれどその頬は艶かしく上気して、眉は悩ましげにひそめられて、気だるそうな淫靡な表情を作り上げているようだった。それを見つめていたイドはニヤリと笑い、ティアナの耳元に唇を寄せてささやく。
「ふふふ……たまりませんよ、その表情……それほどに犯してほしいと言うなら、私がお相手して差し上げましょう……姫君」
その冷たい響きに背筋が震え上がるのを感じると同時、割れ綻んだ陰唇に宛てがわれた

熱の感触に、ピクッと腰をはね上げるティアナ。恐る恐る視線を下げ、その部分を見た瞬間――ティアナは絶叫を迸らせる。

「いやっ、いやぁぁぁっっっ！　やめっ、やめてっ、それはダメッ、ダメェェェッ！」

（や、やだっ！　挿れないでっ……お願いっ、それだけは……膣内（なか）、挿れちゃ……っ）

己の秘部にピタリと押しつけられた熱い感触の正体、イドの股間からそびえる太くゴツゴツとした肉棒を目にしてティアナは激しく暴れ回る。けれど身体全体から流し込まれた快感に蕩かされ、涸らすことなく蜜をこぼす媚肉はその肉塊に悦んで吸いつき、淫らに蠢いて挿入を促してしまう。

「身体のほうは望んでいるようですよ、私に犯してほしいとねぇ……」

ジュプリ……と僅かに進んで埋め込まれた肉の感触に、ティアナはゾワゾワと全身を総毛立たせ、腰をくねらせて逃れようと躍起になる。だが――。

――ニュルゥゥ……ジュプッ、ニチュゥゥ……。

「ひぁっ、あっ……いやぁぁっっ！　だ、ダメッ、もう抜けっ、抜いてぇぇっっ！」

限界まで開いた淫肉をさらに大きく割り開きながら、子供の拳ほどの亀頭が半ばまで沈められる。ミチリ……と肉を軋ませながら膣道をこじ開け、肉の塊を咥え込まされる苦痛にティアナは絶叫もできずに呻くような悲鳴をこぼす。

「ひぎっ、ぁ……いっ、たぁっ……あぁぁっ、あぁぁ……」

赤い瞳は滲んだ涙で潤み、それなのに触れられる膣肉ははしたないほどにざわついて、

痛みに混じるような快感を生みだしてくる。針を刺されるような鋭い快感を浴びつつ、ティアナはピクピクと全身を痙攣させ、知らず知らずに腰を浮かび上がらせていた。
そんなティアナの反応に邪な笑みを浮かべながら、イドは耳元でささやく。
「ふふふ、生涯一度の大切な瞬間ですよ……しっかりと刻み込んで差し上げましょう！」
（やだっ、やだやだやだぁぁっ！　抜いてっ、挿れないでっ、挿れるの……いやぁぁっ！）
――ズチュニュルゥゥッ……ブツッ、ニュプゥゥ……。
「いっ、いや……っ、あっ、あああぁぁぁぁ――っっっ！」
肉の引き裂かれる激痛とともに、身が焼けるかと思うほどの熱い感触が肉穴を刺し貫き、ティアナの悲鳴を迸らせる。プチプチッと処女膜が破られる痛みが鋭く突き刺さり、ヒクヒクと痙攣する膣道を押し広げながら、イドの剛直が体内に捻じ込まれてくる。けれど犯されているということに抵抗をしているのは思考だけ、肉体は牡による蹂躙を歓待するように大量の淫涎を潤滑油として溢れさせ、以前咥え込まされた肉棒などよりも数段太く逞しい牡槍を、したくもないのに淫肉で噛み締めながら、奥へ奥へと導いてしまう。
（こ……こんな、奴、にぃっ……あ、あたしの……初めて、が……くっ、うぅっ……）
「ひはっ、やっ……あひっ、ひゃぐぅぅ……んうっ、うんぅ……あはぁぁっ！」
心の中では屈辱に唇を噛み、悔しさが溢れている。なのに蕩けきった淫肉が肉棒に捏ねられ、こちらからも吸いついて痺れさせられる感覚に、ティアナはうっとりと瞳を細めて舌を突きだしてしまう。それはけっして忘れることができない、口の陵辱で覚え込まされ

た、生まれて初めての快感――あれとまったく同じ、甘美で淫猥な味だった。
「ど、どうして、こんなっ……こんなぁっっ……んひっ、ひぃぃんっ！」
陵辱の記憶が呼び覚まされ、空気に触れるだけで唇がピリピリと疼いてしまう。口内からは飲み込みきれないほどの涎がこぼれ、それと反応するように淫口からも牝蜜が滴っていた。性交によって膣内を犯されることにより、口でも同等の快感を覚えてしまう……それは言霊によって身体の奥底に刻み込まれた、呪いとも言うべき淫靡な擦り込みだった。
「ふふふ、いかがですか姫君……私の肉棒の味を、しっかりと覚えていただきますよ！」
「くひっ、ひぃぃんっ、んぁっ、はぁぁんっ！」
イドが耳元でささやきながら腰を押し込み、肉襞を限界まで割り開いて子宮口へ肉棒を叩きつける。その痺れるような疼きを味わわされ、ティアナはプルプルと小刻みに震えながら妖魔の身体に身を寄せてしまう。それほどに甘く、蕩けるような快感が下腹部から全身に染み広がっているのだ。
（ふぁっ、あぁ……いやっ、こんなっ、こんなのぉ……っ）
ビクンビクンと腰が跳ね、膣道の淫肉が肉棒を柔らかく包み込みながら締めつけて、その感触に酔いしれている。焼けた鉄のような肉棒の淫熱が膣道を満たし、その悦びが喉を突いて飛びだしそうだった。僅かにでも口を開けば、心の奥底に響く本音がもれてしまいそうで、ティアナはギュッと唇を引き締めて、口を閉ざす。けれどそれで擦れあう唇同士がさらなる甘い快感を呼び、両眼を見開きながら眉を寄せ、淫らな表情を浮かべたままの

竜姫士はさらに強い力で妖魔に密着してしまう。なにかに縋って渾身の力を込めて踏ん張らないと、あっという間に口が緩んでしまうのが自分でもわかっていた。

（あ、あぁ……いやっ、あたし……っ、なんて格好を……んっ、んんぅうっ！）

その仕草はまるで、愛しい相手に甘い性交をねだって腰を振る、恋する乙女のようである。頬を擦り寄せ、腰をくねらせ、自分に覆いかぶさる相手の脚に、自分の脚を絡ませて舌を突きだす。どれほどみっともない格好であるのか、しかもそれがさらなる快感を呼ぶのだと理解しても力を抜くことができない、自身の身体にさえ裏切られたような、最低の屈辱であった。だが、そんなティアナの努力をも無にするように、イドはティアナの身体を抑え込んで上半身を引き離す。支えを失ったティアナは緩んでしまう唇を押さえることもできず、喉奥からはしたないほどの叫びを放ってしまう。

「あひぃぃぃんっ、ひぐっ、ひきぃぃぃっ！　いひっ、いひぃぃぃ――っっ！」

「ははははっ、なんとも淫らな歌声ですよ、姫君！　さぁ、もっとお聞かせくださいっ！」

――ヌプゥ……ジュポォォッ、グチュッ、ニュルゥ……ジュグチュゥゥッ！

自身の腰をティアナの腰にピタリと押し当て、螺旋を描くように緩やかな動きで膣内を掻き回す、イドの優しい腰の動き。身体の奥底から嬌声を搾りだそうとするその性技によって、必死に引き締めようとしても、唇がたちまち割り開かれてしまう。熱く長い肉幹で膣襞を捏ねられ、硬い亀頭に子宮口を撫で回されるその感覚は、腰が抜けてしまうほどに甘い快感をもたらした。媚肉が抉られ、結合部からグッチュグッチュと淫水が噴きこぼれ

るほどに膣内を掻き混ぜられると、もはやティアナには抗うことなどできない。
「んはぁぁっ、あぎっ、いひゃぁぁっっ！　いひゃっ、はっ、はひぃぃんっ！」
技術も愛情も申し分ないとさえ思えるような、イドの熱烈な腰使いにティアナは心を侵され、身体の芯が快感で蕩けさせられる。亀頭の肉傘に膣道を押し開かれ、微かに腰が引かれるだけでも媚肉がめくれ返ってしまいそうだ。ゴツゴツと浮き出た血管の形さえわかるほどに肉棒を押しつけられ、それを最奥まで飲み込まされて貫かれる快感の前には、嬌声をこらえようとする努力など、濁流に呑まれる木の葉のように脆いものだった。
（いやっ、いやいやいやっっ！　こんなの、感じないっっ、感じないぃぃぃっ！）
心の中では僅かばかりの理性が否定の言葉を叫ぶ。だがそんな抵抗さえも許さないというように、イドの指先がティアナの身体を這い回り、その胸元へと伸ばされる。
「ふふ、こちらも窮屈そうですねぇ……少し可愛がって差し上げましょうか！」
「はひっ、いひゃぁぁっ……あひんっ、ひっ、んくぅぅっ！」
ドレスの上を指が這い、滑らかな布地越しに慎ましい乳球が、ギュウギュウと絞るように揉みしだかれる。手の平に圧迫された乳首がジンジンと痺れを発し、甘い痛みが胸に込み上げ、ティアナは大きく身を仰け反らせて嬌声を上げた。妖魔の気の向くままに甘い声をもらしてしまうことが、悔しくてたまらない。
「これはこれは……慎ましいくせに随分と感じやすい、いやらしい乳首ですねぇ」
「か、感じてなんてっ、ないぃ……ひくっ、んふぅっ……」

『第三章　恥辱の触手姦』より

自分ではどうすることもできないほどの激しい快楽の奔流に呑まれながら、それでもティアナは幼馴染を思いやり、その顔を上向かせる。しかし――。

「ひぐっ、んはっ……あぁっ、いやっ、いやですっ、こんなぁ……んふっ、うぅ……」

そこにあったのは、美しい顔を悲痛に歪め、けれど細かな喘ぎをこぼして咽び泣く少女の姿だった。自分が守らなければならなかった可憐な花、それが無残にも散らされてしまった事実を突きつけられ、そのショックにティアナは声を上げることもできず、ミアキスと同じように悲しみの呻きと喘ぎをもらすことしかできない。

「うぅっ、うあぁぁ……ミア、キスゥ……んぐっ、うっ、うぅぅんんっ……」

それほどに心を責め苛まれ、泣き叫びたいほどの痛みを味わっているというのに、どこまでも浅ましく反応してしまう最低な肉体が、疎ましくて仕方がなかった。ティアナの腰が動くのに合わせ、男女の駆け引きを熟知しているかのような触手の動きが、容赦なく腸壁と膣粘膜を抉り、内から外へ押し開くように膨らんで、その淫道を拡張してくる。触れられただけで感じるような、敏感な粘膜を強く刺激され、ティアナははしたなくも大声で喘ぎ、ビクンビクンと背中をはね上げて快感を訴える。

「ひあっ、あひっ、あひぃぃ……ミ、ミアキスッ、んくっ、んふぅぅんっ！」

「はぐぅ……んっ、ティ、ティアナ様っ……ひぅっ、うくぅっ……」

快感に蕩ける声で喘ぎつつも、ティアナは懸命に幼馴染の名を呼び続ける。だが、その声音が破瓜を迎えたばかりの少女を発情へ促すのか、ミアキスは痛みを誤魔化すかのよう

に、苦しみの中から快楽を選び取り、王女の呼びかけに応えながら甘く鳴いてしまう。
二人の少女が互いを思いやり、甘い嬌声をもらす様は、陵辱を楽しむ女妖魔の目と耳を存分に楽しませていた。
「ふふふ、お美しいですわ、お二人とも……さぁ、もっと淫らに悶えてくださいな！」
――ジュプッ、グチュッ、ニチュゥウッ！　グプッ、グッププッ！
「いひぃぃっ、ひぎっ、いあぁぁっ……い、たいぃ……んくっ、うぅぅんっ……」
ライラが強引に腰を叩きつけるとそれに合わせて触手が蠢き、血の滴るミアキスの淫裂を掻き回すように愛撫する。だが、もれ聞こえる呻きが示すような苦痛だけでなく、粘膜をこそがれることに僅かな悦びを感じ、ミアキスは腰を震わせていた。双穴からは意識せぬ内に淫蜜が溢れており、抽送に合わせて、クチュクチュと微かな水音が響く。
「んふぅぅんっ！　んはぁぁっ、あはっ……あぁぁんっ、ふあぁぁ……あくぅっ！」
触手に引き上げられるように顔を起こし、ミアキスの両脚に顔を突っ込むような体勢で犯されているティアナ。もはや触手姦の虜にでもなっているのではと思うほどの喘ぎを響かせ、腰を振り立てている。ミアキスが傍にいる恥ずかしさに、必死で快感を遠ざけようと気を張るのだが、腸液に塗れた肉壁をズルズルと引き抜かれる触手に舐められると、それだけでゾクゾクと背中が震え、全身から力が抜けてしまう。それを狙ったように膣奥に向けて触手が叩きつけられ、子宮口を小突かれると目眩がするほどの快感が奔った。
「あひっ、ひぅぅ……やぁっ、胸っ……はぁぁ、やめっ……んきゅふぅっ！」

幾度となく訪れる絶頂の波に合わせ、蔦触手が乳首をキュッ、キュッとリズミカルにつまみ、小刻みな振動を加えて扱き立ててくる。途端に胸の奥から熱いものが込み上げ、次の瞬間には最高の解放感とともに、ビュルビュルと射乳してしまう。牝汁と腸液、涎に母乳と様々な体液を垂れ流すティアナの足元には粘液質な水たまりが広がっており、軽く呼吸するだけで脳が桃色の霧に包まれてしまうほどの、濃厚な牝臭が漂っていた。

「あふっ、あっ……ティア、ナ……様、のぉ……あんっ、んっ、香りが……んぅっ」

淫猥な香りに誘われるように、ミアキスは一歩ずつ絶頂への階段を昇り始め、甘い声音を押し殺すことなく響かせる。ライラの指摘するように、自慰の経験がいくらかあるせいだろう、ティアナのような細工を施されることもなく、肉体は快感の頂を受け入れるように綻んでいるようだった。

「ほら、淫乱王女殿下、ご覧になられますか？　ミアキス様が絶頂を迎えられますわよ……貴女が守れなかったばかりに、私と触手などに純潔を奪われてねぇ？　ふふふ……」

「っっ、はぁっ、あぁぁ……ミア、キ……ス、ミアキスゥッ……んふっ、ふやぁっ！」

頭上から注ぐ言葉に、己の無力さを再認識させられる。けれど、ミアキスが目の前であられのない姿を晒そうとしているという想像――その背徳的な期待感になぜか胸が震え、キュンッと子宮を疼かせてティアナは幼馴染に甘く呼びかける。

「ひぁうっ……ティ、ティアナ様ぁっ！　あんっ、あっ、あはぁぁっ！」

自分を呼ぶ声に興奮を煽られ、ミアキスはブルブルと一際大きく身体を震えさせ、とう

とう絶頂の淵にまで突き上げられる。ライラは限界まで引いた腰を再度激しく叩きつけ、腸奥の結腸まで届くほどに肉塊を深く咥え込ませた。触手はウネウネとくねりながら膣壁を捏ね回し、包皮を半ばまで剥かれた陰核をつまみ、捻るように引き上げる。それと同時に、腸奥に捻じ込まれた肉塊が大きく膨らみ、その昂りを放出させる。

――ビュクビュクビュクッ、ドプッ、ビュルゥッ！

「んひきぃいっっ⁉　ふやぁっ、イッ……イキますぅぅっ、んふぅぅんっっ！」

「んあぁぁっ、ミ、ミアキスゥッ、んひっ……ひぐっ、ひあぁぁんんっ、イクゥゥッ！」

刹那、ミアキスはライラに身を預けるように仰け反り、ピンと足先までを張り詰めさせ、絶頂の波にガクガクと打ち震えた。双穴に咥え込んだ肉塊と触手を噛み締めるように括約筋に力が加わり、腸奥に熱い粘液を注ぎ込まれながら、ビクッビクッと痙攣するように腰をくねらせてその余韻に溺れる。触手に蹂躙された陰唇の隙間からは透明の淫液飛沫が迸り、間近に置かれていたティアナの顔面にパシャパシャと浴びせかけられた。

幼馴染がもらした牝蜜の淫らな香りに誘われるように、官能を昂らせたティアナも目の前の少女と同じように背筋をブルブルと震わせ、双穴から注がれる蕩けるほどの快感に、絶頂を迎えてしまう。プシュゥゥッ！　と陰唇から透明な飛沫が上がり、射乳と混ざりあって床に染み込むその光景が眼下に見え、王女は羞恥に身を焦がす。

「んふふっ、お二人ともいやらしいこと……んっ」

擬似射精の快感に小さく身震いし、ミアキスの菊壺で陰核をヒクつかせるライラ。同時

に触手が膣内からこぼれ落ち、その瞬間――快楽に蕩けた身体が括約筋を完全に弛緩させ、下腹部に溜まった迸りが堰を切ったように、小孔を穿って溢れだす。

「ひぁっ…ふぁっ、いやっ……ティアナ様っ、見ない、でぇっ……んっ、んぅ――っっ！」

――ブシュッ……ジョバァッ、ブシャァァァッ！

「んぷぁぁっ⁉　ふぐっ、んぷっ、んんぅぅぅっ、んぅぅっ！」

割れ目から激しい勢いで噴き溢れた薄黄色の小水が、淫液に塗れてテラテラと汚れていたティアナの顔を洗い流すように降り注がれる。けれどティアナは顔を背けようともせず、浴びせかけられる黄金水と淫液にうっとりと瞳を細め、絶頂にヒクつく陰唇の動きを、そして裏返された肉皺の一筋一筋を、ただひたすらに見つめ続けてしまう。

（ミアキスが……お、おもらしして……んぅっ、オ……オシッコ、あったかぁい……）

お湯のような温かさが白いドレスを黄色く染め、肌にじんわりと染み込んでくるのを感じ、ティアナはうっとりと瞳を細める。妹のように大切な少女が快楽に喘ぎ、粗相してしまうほど激しい絶頂を迎える光景は、なににも勝る媚薬だった。その光景を見つめながらグチュグチュと双穴を掻き回され、またもビクビクと身を跳ねる。鼻先をくすぐるミアキスの牝臭が、自分の理性を剥ぎ取って牝の本性を剥きだしにさせているようだった。

「はぁぁ……んちゅっ、ちゅぱ……れるぅ、んちゅぅぅ……」

思わず舌を唇に這わせ、顔に纏わりつく汚液をまとめて掬い取り、ピチャピチャと愛しげに舐め啜るティアナ。――けれど、それを目にしたライラはクスリと笑い、口を開く。

「なぁに、貴女？　顔にオマ〇コ汁浴びせられて、オシッコまでかけられていますのに、怒るどころか美味しそうに舌を鳴らして舐め取るだなんて……随分といやらしくなったものですわねぇ？　それとも、骨の髄まで変態だったのかしら？」
「んぐっ……んんぅぅっ!?　ぷぁっ、はぁぁっ、だ、誰が……っ、違うわよっ……」
その嘲笑を受け、自分がなにをしているのかにようやく気づかされ、ティアナは慌てて顔を背け、淫液を払うように頭を振る。だが、その様子を見てなにかに気づいたライラは、唇を邪悪に歪め、地下牢に響くような声で言い放つ。
「あら、そうですの？　けれど……それにしてはまったく嫌がっていないようですし、顔も蕩けきっていましたわよ？　あぁ、もしかして……」
弧を描いた唇が赤い舌にペロリと舐められ、そしてゆっくりと開かれる。
「もしかして……ミアキス様のものだから、平気だったのではありませんの？」
「え……？　っっ……なっ、なにを……っ」
思わぬ指摘にティアナは瞳を見開き、ビクッと全身を震えさせた。その反応を見逃さず、女妖魔は口端を歪めて矢継ぎ早に言葉を浴びせる。
「ミアキス様のことが大好き、愛しくて愛しくてたまらない……だから、このコにならオシッコをかけられても構わない……ふふふ、なるほど、そういうことでしたのねぇ？」
含み笑いを響かせるライラのその言葉に、脱力しきっていたミアキスも驚愕の表情で顔を上げ、股下のティアナを見つめる。その視線を受けた王女の顔はみるみる真っ赤に染ま

ってゆき、どんな屈辱を味わわされたときよりも激しい口調で、叫ぶように言い放つ。
「ちっっ……違うに決まってるでしょうっっ！　お……憶測で、物を言うなんて……バカじゃないの、あんたぁっ！　ミ、ミアキスのことなんかっ……こと、なんかっ……」
しかし、必死で否定しようしていても、どうしても決定的な一言が告げられない。相手の言葉を認めることになろうと、愛しい幼馴染を嫌いだなどと言えるわけもなかった。
（だって……だって！　好きなんだから……し、仕方ないじゃないのよ！）
自身の言に確証を得たライラは勝ち誇ったように笑みを深め、さらに王女を揶揄するような言葉を、ミアキスにもはっきりと聞こえるように吐き続ける。
「まぁ……そんなに真っ赤な顔をなさって。よほど、ミアキス様のことがお好きですのねぇ？　同性を好きになって、しかもそのオマ〇コ汁を啜って悦んでいらっしゃるだなんて、呆れた変態王女ですこと！　ミアキス様もお可哀想ですわ……おほほほほっ」
（うぐっ、うぅぅ……ミ、ミアキスに、知られて……あたしの、気持ちが……）
もうなにを言ったところで否定などできない。それを理解したティアナは、心の奥底から湧き上がる羞恥と悲しみに、心を打ちのめされてしまう。そして同時に、そんな気持ちが受け入れられるはずもないと、身の凍るような恐怖が這い上がってきた。
（い、いや……ミアキスッ、やめて……こっちを、見ないでっ……そんな目でぇっ！）
突き刺さるミアキスの視線を感じ、恐ろしくてそちらを見られない。深い悲しみと、可哀想なものを見るような憐れみのこもった視線が向けられるのを想像し、それが心を責め

苛む。同性を愛するような女を気持ち悪いと思っているのでは……そして、そんな王女を敬愛していた自分に嫌悪さえ抱いているのではないか、悪い想像はあとからあとから湧き上がり、快感で打ちのめされて弱りきったティアナの心は、深い亀裂を生じさせられる。

「うぁ……あぐっ、うぅぅっ……うあぁぁぁっっ、あぁぁぁっっ！」

ミアキスの視線に耐えかね、とうとうティアナは顔を背けてボロボロと涙を流してしまう。大切な人を守ることもできず、しかも陵辱される様に欲情までし、挙句は自分の秘めていた想いまで暴露され、その相手には軽蔑の視線を向けられる――最低の気分だった。

そうして、ティアナは周りの音さえも聞こえぬほどの大声で泣き喚き、その心の弱さを剥きだしにしてしまう。王女はただ自分に――自分の無力さに、涙を流すばかりだった。

◇

玉座の間にて、一人その光景を空間の揺らぎで見つめていた黒衣の魔人は、その唇を邪悪に歪め、低く重苦しい呟きを口にする。

「ふっ、ふふふ……ついに堕ちるか、ティアナよ……待ち侘びたぞ、このときを……っ！」

広い空間に響き渡るその言葉通り、王女が贄と捧げられる瞬間は、もうすぐそこまで迫っていた――。

『第四章　魔人の淫贄』より

「随分とご満悦のようだな、ティアナよ……だが俺はまだ精を吐いておらぬ、これでは満足できぬぞ！」
「あひぃぃっ、ひぐっ、んっ……はぁぁんっ！　しゅ、しゅごぉっ……ゴツゴツってぇ、奥まで、きてっ……んひっ、し、しきゅぅ……ひ、ひらいちゃ……うぅん♥」
　子宮口に亀頭が半ばまでめり込んだかと思うほどに、ゲートリッチの極太牡槍が膣道を削り開いて叩きつけられる。目の前にチカチカと激しい火花が飛び散り、髪を振り乱しながらも肉を満たす悦びに咽び泣いて嬌声を上げるティアナ。その瞳はもはや快楽しか映しておらず、肉欲に溺れた淫魔のごとき姿だった。
「ふふふ、ティアナよ……ここに欲しいのではないか？　俺の熱い精液をここに注がれ、魂をも白濁に染めるほどの、激しい絶頂を迎えたいのではないか？」
　上半身を起こし、背後の妖魔とともにティアナを抱え上げながら淫裂を突き上げ、ゲートリッチが低い声音でささやきかける。
「んひっ、あ、あぁ……ひぐぅ、ほ、ほしぃ……れすぅ……ぅんっ……」
　子宮に精液をぶちまけられ、胎内を汚し尽くされて膣襞で汚液を味わう想像に、ティアナはゾクゾクと背筋を震わせて答える。それだけで膣道がヒクついて肉棒に絡みつき、染み溢れる淫涎が結合部から飛沫を上げて飛び散っていた。
「あら、聞こえませんわよ？　もっと王国中に響き渡るように大きな声で、いやらしくお答えくださいな……ふふ」

乳首を指先で挟み、コリコリと転がしながら、耳元へライラまでが語りかけてくる。そして突きつけられるのはイドが手にする手鏡、そこに映るティアナの淫蕩に微笑む顔は、どの痴態よりも大きく王国の上空に晒されていた。

「あっ、はひぃ……あ、あらし、はぁ……ティアナは、ここにぃ……」

口元に突きつけられた肉棒にチロチロと舌を這わせながら、鏡に艶やかな流し目を送ってティアナははっきりとその言葉を口にする。

「オ、オマ〇コにぃ……グチョグチョで、オチンポ大好きな、ティアナの牝マ〇コに……せーえきぃ、ビュルビュルって、してほしいんですぅ……お、お願いしますぅ、ご主人様ぁっ！　せーし、せーしぃっ……ティアナのお腹にっ、いっぱい飲ませてくださいぃっ！」

そう口にして音高く肉棒に唇を押しつけるなり、妖魔のペニスが弾け、白く熱い迸りを顔面に浴びせかけられる。顔射された瞬間を王国中に目撃され、その羞恥は悦びとなってゾクゾクと身体中を駆け巡った。白濁を幾筋も垂らした顔に舌を伸ばし、ティアナは完全なる牝となったように、淫語を口にし続ける。

「はひゃっ、はや、くぅぅんっ！　チンポッ、オチンポで突いてぇ……せーえき、ちょうらぁいいっっ♥　オマ〇コしてっ、ケツマ〇コもしてぇぇっ♥」

淫らな笑みを満面に広げ、両手にした肉棒を扱き立てながら、腰を振り乱すティアナ。その痴態にはもはや王女としての誇りなど欠片さえも残っておらず、奴隷として生きることに喜びさえ見出しているかのようだった。そのはしたない仕草と痴態に満足げに笑うと、

ゲートリッチは激しく腰を叩きつけて吼えた。
「ふふっ、ふはははははっ！　よかろうティアナ、望み通りにくれてやる！　王国の屑どもが指を咥えて見ているその前で、貴様の胎内に俺の子種を注ぎ、魂まで貶めてやろう！」
「あひっ、ひぃぃんっ！　あ、ありがとう、ごじゃいまふぅぅっ！」
ズバンッ、パァンッと恥骨が打ちつけられるたび、子宮の奥底に火が点いたような淫熱と、熱い快感が流れ込んだ。菊壺を絶え間なく抉られ、膣襞が極太の肉傘に掻き回されて広げられる狂おしいほどの快感、そして鼻腔に溢れる精臭と、精液の味……そのどれもがティアナの理性を粉々にし、本能を剥きだしにさせる。
「う……あ、あぁ……ティア、ナ……様……っく、うぐっ、うぅぅぅっ……」
遠くから聞こえるミアキスのすすり泣く声は、心どころか耳にさえ届かない。いまの王女にとってはそんなものより、身体中に溢れる快感のほうが何十倍も大切なものだった。あちこちから響く肉の打ちつけられる音に鼓膜は痺れ、脳に快楽を押し流してくる。全身に擦りつけられる肉棒の感触に、全身を性器にでも変えられたような悦びを覚えてさらに腰を振ると、もはや言葉にもならぬ喘ぎばかりが喉をついて溢れた。
「あぎっ、ひきぃぃんっ！　んひっ、ひはっ、んはぁぁっ！　はっ、ふぅぅんっ、んぐっ、んじゅるっ、んっふぅぅんんっっ！」
慎ましやかな乳房の先端に熱い感覚が込み上げ、ミルクとなって撒き散らされる。もう数えきれないほどの絶頂を迎え、体力も底を尽きかけているというのに、その性欲はけし

て収まらなかった。牝としての最高の絶頂、子宮に精を注がれるという、身も心も支配されるような快楽の極みを受けていない……その思いが、さらなる絶頂の淵へとティアナの意識を羽ばたき昇らせる。

「ひぃぃんっ、んはぁっ、あはぁぁ……んぅぅっ！　んぐっ、ひきゃぁぁっ！」

叩きつけられる腰に陰核が押し潰され、喉奥から呻きとも喘ぎともとれぬ声が響く。その声に煽られ、妖魔たちの輪姦はさらに激しさを増し、ティアナは身体の芯までをジン……と熱く疼かせ、全身を何度となく跳ねさせて悦楽に打ち震える。

「あひゃっ、ひぅっ……んっ、んぁっ、は、ひゃ、くふぅ……もっ、もぉぉ……」

上下に揺さぶられる腰が、ガクガクと躍るように痙攣を続ける。結合部から溢れた淫液は滝のごとくダラダラと流れ落ち、粗相と見紛うような状態になっていた。瞳は淫猥を通り越して色を失ったように呆け、だらしなく唇が開いて舌がダラリと垂れ下がる。

「ふふふ、限界のようだな……射精してやるぞ、ティアナ！　俺の奴隷となった証を子宮に刻まれ、盛大に気をやるがいい！」

「あっ、あひがぁ……んにゅぅぅっ、ひはっ、ふやぁぁっっ！」

ゲートリッチの言葉に応える間もなく、魔人の肉凶器が内臓ごとひっくり返さんばかりに膣襞を抉りながら引き抜かれてゆく。凄まじい快感に全身の毛穴が膨らみ、心臓の鼓動が急速に高まって、激しい呼吸音が口から溢れる。目の前が真っ白になるような感覚が脳いっぱいに広がり――次の瞬間、それまで以上の衝撃が下腹部を突き抜けた。

「んぎひぃぃっ、ひやっ、んぉ……んびゃぁぁあっっ！」
鍛えられた筋肉によって戻ろうとする膣道を、射精寸前の広がった肉傘に押し開かれる感触は、ただ擦り上げられるよりもさらに強烈な快感を送り込んできた。ビクビクッと背筋を仰け反らせ、白眼を剥いたアクメ顔を上向かせるティアナ。そこに――。
――ビュルビュルッ！　ドピュゥッ！　ビュクッ、ビュルルッ！　ビシャシャッ！
「あひっ、あちゅっ、いひぃぃんんっっ！　んふぅぅっ、しぇーしぃっ、イグゥゥッ！」
手の平、口内、そして身体中に押しつけられた様々な肉棒が次々と弾け、生臭い汚液が王女の美貌や細い四肢へビチャビチャと雨のように浴びせかけられる。肌が焦がされるほどの淫熱が官能を燃え上がらせ、全身を包む牡臭に子宮がキュンッと激しく疼かされた。精液塗れにされる快感に、身体中の粘膜がビクビクと震えだし、そのわななきは魔人の肉棒を膣いっぱいに噛み締めさせ、ついに堰を崩壊させる。
「んひっ、きっ、きはっ……しぇーしぃっ、でりゅのぉぉっ、はっひぃぃぃぃっ！」
――ビクビクッ、ビュルルゥッ！　ビュルッ、ビクッ、ドププゥッ！　ビュククッ！
はちきれんばかりに膨らんだ肉棒が膣奥で一気に弾け、想像だにしなかったおびただしい量の熱い迸りが子宮内に溢れ返る。それに合わせて菊壺の肉棒が爆ぜ、身体中を取り巻く肉塊がまたも、ティアナの全身に向けて熱い欲望を吐きだしてゆく。
――ドビュッ、ドブドブッ、ビュククッ！　ビュルッ、ドクッ、ドクゥッ！
「あひゃぁぁっっ、いひっ、いぐのぉぉっ！　んぃぃぃっ、しぇーしぃっ、は、はひって

くりゅっ、かかってるぅぅぅっ！　あっ、ああぁっ、イクッ、んおぉぉっ、イグゥゥッ！」
　ドロドロと浴びせられる精液の塊に瞳を蕩けさせ、いまだビクビクと迸りを放ち続けている胎内の肉棒に淫熱を刻み込まれながら、その身を延々と躍動させ続ける。直腸、口、顔に四肢、身体中と胎内のすべてに注がれる精液をその身に受け入れ、バクバクと高鳴る心臓の鼓動に合わせ、精液が身体中を巡っているような感覚に、絶頂の昂りが繰り返し訪れてしまう。精臭を感じ、粘膜に絡みつかされる汚液塊に支配されながら、ティアナは視界に真っ白な光を溢れさせてなにも見えぬまま、ただ肉欲の命ずるままに意識をはね上げ、快感の爆発に翻弄されてゆく。
「イグゥッ、んぁぁっ、あぁ――っっ！　イグッ、また、イッグゥゥッ！　ひぐっ、ぎひぃぃっ……んぃぃっ、イクッ、イクのぉっ、とまんないのぉっ！　ひぃぃ――っっ！」
　視界がドロドロと溶けてゆき、全身が精液の海に埋まりながらも、身体の奥底から広がる快楽だけははっきりと感じられた。意識が遠のきながらも、その身はガクガクッと激しい痙攣を続け、絶頂の渦に引き込まれてしまう。膣奥からは牝蜜の飛沫がブシャブシャと絶え間なく噴き溢れ、それとともに精液を混じらせた白濁した淫液がドロリとこぼれ、股下に卑猥な水たまりを広げてゆく。
「んひぃぃっ、あっ、はぁぁ……ふぁっ、あぁん……」
　やがて萎えた肉棒が双穴から引き抜かれると、その衝撃に再度ビクビクと震えたティアナは、それでようやく絶頂の終わりを迎えたようにグッタリとし、虚ろな瞳を湛えたまま、

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/